

2023年 5月21日(日) 主日礼拝宣教

使徒言行録 1:3~11 「主イエスの昇天」

No.1

使徒言行録は、「医者 of ルカ」と呼ばれた人物によって主イエスの地上での宣教の働きと十字架、復活までの出来事を述べたルカ福音書の続編として、記されたと伝えられています。ルカは、この書物の中で、主の教えを受け、主の復活の出来事の証人として立てられた使徒たちが、当時の世界の中心であるローマとその周辺の国々に向かって、主の十字架の恵みと、主の復活に基づいた信仰の希望を宣教していった様子を記しています。ここには、聖霊の働きが生き生きと描かれ、人の働きや思いを強め、神の御心を行うための力としてそれが作用したことが記されています。時代的な背景から見ると、言行録は、主の十字架と復活以降の時代、1C~2C にかけてのキリスト教会による宣教が始められた初期の時代にあたります。あたかもキリスト教がユダヤ教の派生した団体のように扱われてきた時代、様々な関わりやせめぎ合いを経て、やがては完全に袂を分かつことになる両者の関係、そしてローマ帝国による世界支配がなされる中で、その勢力が徐々に陰りを見せ、様々な国や地域にある人々が、あたかも大きな時代のるつぼの中で熱せられる金属のように、ふつふつと溶けて新しい時代へと向かって行こうとしている、そのような前兆と混乱の中で、キリスト教の信仰が世界に伝えられ、根を下ろしていく過程をダイナミックに見ることが出来ます。

ルカ 1:2 で「多くの人々が既に手を付けています。」と述べるように、この書物自体は、同時代のユダヤや周辺社会の情報や資料を多く用いています。ルカの思想の特徴は、旧約において示された神の預言の言葉が、イエス・キリストというお方において完成したとする神による救いの歴史、救済史によって貫かれています。全体的には、主イエスが天に上げられた出来事と、それに続くペンテコステの日の出来事をきっかけにして、主を信じる人々によって、主の出来事を宣べ伝える伝道の業が世界に向かって行われていく様子が記されます。この書物の大体半分は、そうした初期キリスト教会の様子や宣教の働きについて書かれ、それ以降は、初期の宣教の中心を担っていった宣教者であり、使徒パウロの半生についてが記されています。世界の各地に散らされていたディアスポラと呼ばれた離散のユダヤ人、在外ユダヤ人、ないしはユダヤ教徒と、ユダヤ教の律法や聖書の教えに全くと言っていい程縁の無かった、ユダヤ人から言うところの、所謂「異邦人」への宣教によって、教会は大きく発展していきます。同時にそれはやがて、信仰理解と宗教的習慣の違いによって、両者の激しい対立や決定的な離反を生むことにも通じていきます。

1:3 には、苦難をうけた後、つまり、死んだ後に、主はご自身が生きていることを多くの証拠で示しました。これは、復活の出来事が実際に起こったことを示すため、例えば、不信に陥っていた弟子にご自身を触ってよく見なさい(24:37)と示し、またご自身の体をお見せになって焼いた魚を食べた(24:39)ことなど、ご自分の復活の有様を弟子たちに示しました。主はそうのように 40 日にわたって弟子たちに現れて、彼らに神の国について話をしまし

2023年 5月21日(日) 主日礼拝宣教

使徒言行録 1:3~11 「主イエスの昇天」

No.2

た。主は彼らに、エルサレムを離れず、父から約束されたものを待て、と命じます。この言葉は、ルカ 24:47、49 の言葉とも一致します。こののちに生じる聖霊降臨の出来事も、世界に向けての教会による宣教の働きも、共にエルサレムから、エルサレムを起点として行われていくからです。ルカ 24:45 以下で、「イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて、言われた。「次のように書いてある。メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。エルサレムから始めて、あなた方はこれらのことの証人となる。」の言葉を思い起こします。ルカにとって、エルサレムは、復活の主イエスが神の国を弟子たちに述べ伝えた「キリストの時」と、その後、教会の宣教によって福音が世界になされていく「教会の時」を結び付ける場所であるからなのです。

ヨハネ 13:34 には、主が弟子たちに命じた掟が記されています。「互いに愛し合いなさい。私があなた方を愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うなら、それによってあなた方が私の弟子であることを、皆が知るようになる。」と述べ、それに続く 14:15 以下で、あなた方は私を愛しているならば、私の掟を守る。私は父に願って別の弁護者を遣わしてあなた方と一緒にいるようにしてくださる。この方は、真理の霊である。」と、主の名によって遣わされるこの霊(聖霊)が、主を信じ、主を愛する者に全てのことを教え、主について証しし、主が話したことをことごとく思い起こさせる、と語られています。言行録 1:5 の聖句は、主が弟子たちに予め語って聞かせた、父から与えられる賜物である聖霊についての言葉を裏付けするものであると言えます。

弟子たちは主に、主の働きによって、イスラエルを立て直してくださるのはこの時なのか、と尋ねました。ルカ 19:11、ルカ 24:21 でも同じ質問がされています。彼らは、神の定めた終末(終わりの時)を強く意識しながら、主によって終末の時に神の御心に適った正しい秩序が回復するかを問うているのです。その問いに、主は直接的に答えることはしませんでした。それは、父がご自分の権威をもって定めた時や時期は、あなた方の知るところではない、からでした。神が定めた終末の時や、それに至る期間は、神の計画に属することなので、人にはそれを知る権利はない、と答えたのです。聖霊の降臨は、神の救いや終末の時に至る時や時期の始まりを告げるものです。彼らは、聖霊によって力を受け、エルサレムがけではなく、ユダヤ・サマリア、また、地の果てに至るまで、主の十字架と復活、救いの出来事の証人として遣わされることになる、と言うのです。

主イエスはこう語り終えると、弟子たちの見ているうちに天に上げられていきました。彼らが信仰の根拠とした「復活の主」のお姿は、こうして彼らの目の前から消え、主は神からの栄光を受けて、父なる神・聖霊と共に世に臨む存在となられたことを聖書の記述は象徴的

2023年 5月21日(日) 主日礼拝宣教

使徒言行録 1:3～11 「主イエスの昇天」

No.3

に記しています。それはまた、見える存在として彼らを教え、彼らを支えた主イエスを、弟子たちが、或いは主を信じる私たちが、見えざるお方として覚えるということです。祈りを通じて日ごと私たちを守り、支えてくださる方として意識し、私たちにとっての唯一の主として覚え、信じる対象となられたということを意味しています。弟子たちは、雲に包まれて天に上げられていく主の姿を、恐らく呆然とした気持ちで見つめ、見送ったことでしょう。自分たちの歩む今後についての様々な思いや不安な気持ちを抱いていたのかも知れません。

すると、白い衣を纏った二人の人(これは神からの御使いと思われます)が、彼らに語り掛けました。それは、悄然とする彼らへの励ましと祝福を約束する言葉でした。天使は「ガリラヤの人たち」と呼びかけました。これは、エルサレムのような「都市部に生きる人」ではなく、辺境の地に生まれ、主イエスとの出会いを通して信仰に招かれ、主の弟子として神の命とその宣教へと召された彼らへの呼びかけでした。彼らは、当時のユダヤの特権者、ファリサイ派ユダヤ教徒や律法学者たちとは異なり、世を生きる様々な悩みや生きること自体の辛さを抱えて生きていた、ごく普通の庶民でした。彼らに主を証しする使命と、宣教を行うという大きな目的が、与えられていくことになったのです。

主の昇天に関する伝承は、マタイやヨハネの福音書には見られません。マルコでは二次的資料として、16:19にカッコに入れられて書かれています。ルカは、かつての聖書協会訳では24:51で、「天にあげられた」の言葉がカッコに括られて記されていました。このように見てくると、使徒言行録に記される記述が、主の昇天に関する伝承の中では一番長いものなのです。言行録13:31のパウロが証しをする場面の言葉で、「このイエスは、ガリラヤからエルサレムに上った人々に、幾日もわたって姿を現わされました。その人たちは、今、民に対してイエスの証人となっています。」と述べられています。御使いが述べた「あなた方が見た」という言葉は、「主の昇天の出来事の証人、目撃者として見た」、の意味です。1:21～22では、使徒の条件としてその目撃者、主の復活の証人は、記されています。

私たちは、聖書の言葉によって伝えられた主の福音と出会い、多くの人との関りや教えを受け、その伝承を受けとめ、聞きました。そのようにして私たちは、主の復活を信じ、信仰によって主に繋がって生きています。私たちの心を、主の再臨に向けて歩むことが求められています。信仰の歩みは、主を信じて歩む教会の時、信仰の時の中に、恵みの主が共にあることを信じて生きる希望と喜びに溢れた時です。祈りと交わりの中に神の国の喜びと幸いを見出し、主の再臨と神の備えた終末を見据えながら歩む私たちの「今」というこの時は、神の救いの時の中に組み入れられた祝福と幸いに満ちた時であることを心に覚えたいと思います。共に歩んで下さる主の恵みを日々覚えつつ、見えざる御手の導きを信じて前進してまいりたいと願います。